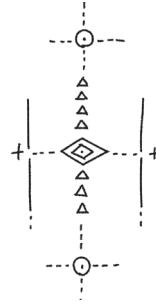


# COSMOS集



手術の日決りて息子呼ばれたり我はひたすら介護老人

秋はつかのま

吉弘 藤枝 埼玉

霜光る麦の畑を眺めつつ朝の空気を深々と吸ふ  
空を泳ぐ水母とも見え町筋をビニール袋が木枯しに飛ぶ  
目の見えぬ知人に香りを届けたく藤袴干しポプリを作る  
木守柿失せて庭の辺末枯れたり八十八歳の秋はつかのま  
信号を待ちつつ苛立つことはなし一人の家に待つ人はなく

窓開ける音

高橋 美羽子 神奈川

眠れずに夜の物音聞きをれば眠れぬ人が窓開ける音  
美味い飯腹いっぱい食ふ幸福感その普遍見る孤独のグルメ  
寢床にて湿疹の痒みもて余し冷たき夜気に痒さ差し出す  
音楽も効果音もなき人生の曲り角いくつこの年齢となる  
おほみそか雨中早朝杖つきて出掛ける媼の行き処を知らず

さがしてをるや

福島 健太郎 神奈川

老人の行方不明となる夕べ思ひ出などをさがしてをるや  
老いゆけばなほさらのこと男とは故知らぬまま負ひ目を懐く  
思ほえず歯の抜け落つる心地して帰り来たり免許返納  
初老ともいふべき紳士 玄関に牛乳をおき営業始む  
午睡せる途中に響く着信音 急発進のごとくに目覚む

小田部 雅子選

「あすなる集」特選

雪山ではない

池松 卯月\*北海道

白銀のアドベンチャーだ！ 通勤は今日もいつもの雪道だけど  
雪道は昨日今日明日明後日で歩き易さは毎日違う

オフィスより眺むる雪の札幌は奥の奥まで真つ白である

「辛くても今日も頑張れ」雪粒が眩きながらこの街に降る

朝は晴れ昼は吹雪いて夜も降る雪山ではない札幌都心

オムレツ

渡辺 幸子\*福島

年などは話題にしなくていいでしょう白寿の大姉口をとがらす  
マイルーム馴染みしほどに懐しく主婦の雑用思いうかべる  
形良きオムレツよりも我が手にて卵焼きたし変形も良し  
まだ元気腰を伸ばして見栄をはる杖なし歩行自慢している

藤野 早苗選

閉じやすい本 清水美里\*東京

幾種もの鳴き声がしてこの窓に朝を引つ張つてくるのは鳥  
（汚れてもいい服）になってしまった買ったばかりのスウェットに墨  
天使らに心を持たぬ個体あり空を飛ぶには重すぎるため  
閉じやすい本でありたいです、ぱたん。なかみをさらし続けるの嫌  
やわらかく頁のあい折り込まれ<sup>スピン</sup>糸紐の色はその著者に似る

枳 殻 藤田邦彦\*東京

「あの川の上流の人は狷介よ」遠州女に絡まれて飲む  
川に下る一本道の対岸も柿の実赤き段丘の村  
峠から見下ろす里に本棟の大屋根残り白梅が咲く  
棘のおく枳殻だんだん色づくを登校下校に眺めて通る  
菜園が楽しと言いし友逝きぬ胡瓜ぼきりと折つてくれしが

からあげ 宮 梓 一\*東京

今年こそ通勤しながら初日の出見ないで済ませたかったけれど  
からあげに勝手にレモンをかけたつて嫌えるような関係じゃない  
ロマンスの神様なんていなかった展望席は今日も完売  
オレンジがだんだん紺を押し上げて深夜を朝に染め上げていく  
特別な日じゃなくなつた十二月二十三日ケーキを食べる

キシロカイン 佐藤多佳子 新潟

かそかなる磁場の乱れにかすれゆく朝のラジオのリュートの響き  
キシロカインどろりと粘る喉元に五年も前のあの瞬間だ  
目の光るちゃんあなごめく内視鏡きゆるりきゆるりと食道進む  
食道の内部はまるで地下道のごとく続けり異常なしとぞ  
神殿の中に誘はれゆくごとし地下道ありて車は進む

ホッツエンプロッツ 清水由美子\*長野

馬小屋を照らしたろうかその晩もクリスマスイヴの澄む月明り  
月あかり雪と見まちがうほど白く庭を照らせり降誕前夜  
正月に帰らない子の幸おもい元日雑煮の大根きざむ  
ひらがなを覚えた五歳がうつメールくすと楽しい ことばは宝  
大どろぼうホッツエンプロッツ五歳児の心を盗りぬその風貌で

大野 英子選

人ごみの中 田原五郎\*京都

言葉なく被災の画像ながめてる運も不運もすぐそばにいる  
夕暮れにヒタヒタヒタと歩く道足跡たどりただひたすらに  
しらぬまにこぼれる言葉ああしんど苦笑いする人ごみの中  
疲れ果て天井見あげよこたわる僕見て君はどう思うだろう  
また来たわそうつぶやいて手を添える枯れ葉が落ちる母の墓石に

目が覚めた 大池 アザミ\*兵庫

アクセルとブレーキ同時に踏んでいるような出勤前のドタバタ  
だいたいのことはわかっていますよという顔をして散歩する猫  
帰省した娘は背中丸くしてこんこんと眠る沈みゆくごと  
くるぶしの下から冷えてこの体パツパツの主張が強い  
眠れない眠れないよと呻いてるはずだったのに今、目が覚めた

黒きボデイ 小野 久美子\*兵庫

置き時計一分早く〇時さし新年スタートフライングする  
二階より降りんと乗ったエレベーター上がってゆくなり十五階まで  
あれこれホイルシートの裏おもて間違え焦げつく目玉焼き二個  
またマスクする人増えて冬の街またマスクして我も街ゆく  
水素バスの黒きボデイは冬晴れのまちの風景映して走る

今日の入日 友田 昌子\*奈良

新春を弾んでやまない寒雀ときめく歌をわたくしよ詠め  
歌会終えはっと見上げる西の空金にかがやく今日の入日は  
わが家の田を引き受けし青年は黄金に稔る稲つくりたり  
左義長は天さし燃える音の立つ生き生きとら田を駆けまわる  
飛鳥野の睦月の風よマンサクの白き花芽は春呼ぶ天使

賽銭渡す 畑 都\*鳥取

水鳥に混じりて二匹のヌートリア日の差す沼を顔出し泳ぐ

石段の急な神社の参拝は孫に託して賽銭渡す

元日の夕べの杜から駆け上る社の煙は竜となりゆく

帰省したばかりの娘は子ら残し能登の震災に職務へ戻る

歌に詠む友の悲しみ読み取れずもいちど文字を噛み締めてみる

大松 達知選

聞くのは野暮だ 松浦 一郎 山口

日は暮れて道なほ遠し帰るさの車窓に上るおぼろげな月

今日も行くファミレスの人何べんもお一人ですかと聞くのは野暮だ

正月の百円シヨップさまよひて何が欲しいかわからず帰る

ふろ上がり生まれ変はつた心地する入浴中に日付変はつて

海峡の金と銀との波受けてブイはしづかに行く船を見る

しまむら 海野 牧子\*香川

すべるように走れる道は舗装され小さな車も乗りごこちよい

ママは好きはくは嫌いと「しまむら」を指さす五歳バスの中より

成人の日の前の日に髪を切り靴を磨きてハイになる亭太

膝ぼうず少しよくなり片付ける途中動けず悲鳴をあげる

カーテンを洗えず窓は拭えずに去年の塵と迎える正月

きしきしきし 福田 春子 福岡

返信をながなが書いてポストまでぶらぶら歩く睦月のゆふべ

目を閉ぢて露天の湯船に浸かるなりときをり睦月の風が来るとも

蒲鉾をきしきしきしと食みながら35度のビールに酔へず  
ひとり逝きうからなき身で死を如何に知りしかとまづ問ひたりわれは  
警察の手により茶毘に付されしと友の死を知る冬の雨の日

ご め ん 石 本 洋 子 佐 賀

はとバスの乗り場探してはぐれぬやう丸の内にて夫と手つなく  
台所のぞけば仄と香を立てて夫が豆腐の味噌汁つくる  
念入りに日ごと揉みたる甲斐ありてこの吊るし柿甘さ格別  
床一面コーヒーの粉を振り零し夫が「ごめん」とわれの眼に詫ぶ



水上 比呂美選 「その二集」特選

う ぐ い す 餅 ぐ だ う れ い ん \* 岩 手

できるだけ大きく虹を描くように黒板消しで消す過去分詞  
大福に黒豆透けるように嘘いくつかあつてどれもちいさい  
冬がまだ来きつていない東北の和菓子屋にもううぐいす餅あり  
つまさきにタイツは余りこの脚が規定のものでない誇らしさ  
歪むようにおっとり朽ちる切り花のランタンキュラスの窪みの暗さ

リハビリをリハーサルと言ふ夫なれど糺さずにおく失語症ゆゑ  
あ れ 田 島 寿 恵 延 \* 大 分

昨日まで木陰さがして休みしが西陽にあたる背中をまるめ  
夏雲がぐんぐん秋をおしかえすくじゅう連山季節の潮目  
かんかに畑の土が怒つてる鋤を拒絶しわれを拒絶す  
籠いっぱい大根の若菜いだだきぬ農をやめたと聞いていたのに  
野球ではあれがあれ呼びわきたつも人の名の出ぬわが(あれ)増える

4 5 7 駅の旅 畠 山 和 宏 \* 岩 手

盛岡駅長崎駅を乗り通す457駅の旅  
駅前ゆ路面電車にゆりゆられ松翁軒のめがね橋見る  
長旅の疲れを癒す街明かり大村湾と眠りに落ちる

徳山と竹田津わたすフェリー降りわが踏み初めし朝明の九州  
あご出汁のかしわうどんをハフハフと啜りぬ鳥栖の乗り換え駅で

赦された時間 白 石 明 男 \* 群 馬

神様の大奮闘を賜りて無事に退院したる年末

ころんだらひとり立てぬ老妻のスーパーマーケット巡りに付き合う  
予後良くて例年通り五人前年越そばを打ち終りたり  
飲み下す力が老いて新年の雑煮は餅を除けて啜りぬ  
余命とは死を赦された時間なり思いのままに晩酌をする

十月 月 桜 谷 真 樹\* 神奈川

荇田よりふりさけみればいにしえのちかくとおい阿夫利の山なみ  
苔むした地蔵が六体ならびおり一番端がこちらを向いた  
靡されし鐘楼のわきのみみじ葉は冬日にすけて燃ゆるがごとし  
不意をつき枯野にあらわるる満開の十月桜にことづてはない  
今はもうわたしの怒りは畔焼きの炎くらいに鎮まっている

へるぶみー 松下 誠 一\* 東京

ヒーターの熱の充満する部屋で単勝がはずれる様をみる  
血を途絶えさせちゃうかとも思いつつなんかいも見に行く夜の川  
踏みはずすことのとやすい道にいて瀬戸際へ来てくれる蝶々  
へるぶみー するとさだけを意識した目つきで雲のない空を見る  
ひとりごとがなんだか増える冬の午後茶化すだけなら関わらないで

田中 愛子選

声 先行 し 上野 成\* 新潟

枕元にて猫が尾を振りたれば冷氣すうつと頬をかすめる  
何十年振りかの林檎の摺りおろし掬えば母の匂いがしたり

風邪気味の夕べ林檎を摺りおろしくれたる妻に母の重なる  
ホー、コーと声先行し東より雪空よぎる白鳥の列  
脇腹の上に眠れる老い猫の重さ温さを実感しおり

雪の深さ 桜井 奈穂子 新潟

落雪式の屋根すべり落つる雪の音聞きつつ量る雪の深さを  
明け方に除雪車ゆけば我が家の玄関前に雪の壁たつ  
出勤の夫に合はせて雪掻くが朝食前の我が仕事なり  
我ながら巧しと思ひ雪掻くをかたへの犬はじつと見てをり  
雪雲の深く垂れ籠めしなぞかる越後三山すがたを見せず

ナポリのマンマ 権田 陽子 静岡

洗濯物ほす手を止めて御向かひと喋るナポリのマンマみたいに  
朝あけに「唐土の鳥は」と歌ひつつ七草炊きたる小さき母の背  
白粥に七草散らすさ緑の色<sup>こはろ</sup>芽え<sup>こはろ</sup>芽えと春の先触れ  
大なるは時を選はず襲ひきて<sup>こはろ</sup>寿の膳泥にまみれつ  
ひとまはり小振りとなりしか白椿手を掛けし人の逝きて何年

汗 小田 沙也加\* 愛知

霜焼けの指広げればスリッパが膨れる腹式呼吸のように  
伝道師みたいだわざと大げさに伝えた英検の新制度  
横揺れに時計は落ちて寒かった夕の身体を湿らせる汗  
白菜をざくざく切つて合いの手は頼むよお隣の洗濯機  
卒論を落とした夢から起きてみればレンジの数字あやしく光る

ポ ッ ト 谷 口 久美子\*三重

休憩室 池田花穂\*福岡

集落も今は湖底となりしとう湖は静かに藍をたたえて  
もみじ葉に染め上げられてひと山は深き眠りに入らんとする  
雨降りて朝な夕なに寒くなり湯呑茶碗の手に温かし  
旧式のポットを未だ手離せず耳になじめる湯をそそぐ音  
耕運機の音はひとときわ高なりて土黒ぐろと宙にとび散る

水上 美季選

新たな春 原 万紀 長崎

みかんゼリー 山 添 聖 子\*奈良 良

朝もやのマラソン大会終えた子の体操服の白の重たき  
全力でみかんゼリーを買いに行く熱の子どものリクエストなら  
それぞれのページをめくる音だけが聞こえる平和な日曜の夜  
白くまの形の餅も並びたり子の加わりて餅丸めれば  
梅の香の雨に匂えばいにしえの奈良の都とつながる睦月

慈姑ほくほく 池 川 紀 江 愛 媛

畑とお日様 瀬 野 茂 子\*宮崎

賀状にて声のデートを待つてるね生きてる証しに一言添へる  
初詣で百段余りの石段を夫の手かりて参拝かなふ  
吾が狭庭千両万両南天の円ら実朱くにひ年迎ふ  
お正月お重の慈姑ほくほくと煮あがり旨しと箸すすむ夫  
七日粥七草の香はほのかなり毎年の如はふはふ啜る

付き合ったことも別れたことも無い私は何もできずバス待つ  
失恋した君にどうしたらいいのだろう山Pの「loves」聴くバス停  
私ที่想う君は誰かを想ってひとりぼっちのクリスマススイヴ  
休憩室の角つこの出たままの椅子さつきまで君が座っていた椅子  
山Pの「青」を聴く朝年末も私は君が大好きだったな

百本の水仙活ければほの甘く去年と今年を繋ぎてかをる  
歳旦のひかり及びて庭に咲く山茶花の花のくれなゐ明る  
裏庭にあふむく椿の黄の蕊に触れては消ゆる初春の淡雪  
裸木と見せて各々芽ぶきをり静かなれども命うごきて  
二分咲きの防風林のやぶ椿新たな春へ灯を点しゆく

不登校を克服したる女の孫の猫と憩える写メール届く  
南天と菜の花・水仙どんと活け二〇二四年の産声を待つ  
喜寿われは現状維持をめざしたし畑とお日様ともだちにして  
株元の新芽に託し切り戻す二ヶ月余り咲きくれし菊  
ふきのとうの天ぶら菜花のおひたしを添えて息子の初弁作る